写真で見る とちぎ 今昔

⑯ 佐野市

旧田沼町の商店街

「写真で見る　とちぎ今昔」第16回は、由緒ある一瓶塚（いっぺいづか）稲荷神社の門前町として発展した旧田沼町（現佐野市）の市街地。300年以上続く同神社の「初午祭」は、3月初めての午の日を中心に3日間開かれ、県内外から例年10万人の人出がある。初午祭とともに栄えた商店街の、昭和30年代を写真3枚で振り返る。

昭和30年代の商店街。ボンネット型バスは「飛駒」行き（佐野市郷土博物館提供）

昭和39年ごろの一瓶塚稲荷神社前。境内の拡張整備が行われる直前で、青銅製の鳥居（手前）と社殿は今より前に出ている（佐野市提供）

初午祭への思い

上の写真は昭和39年ごろの一瓶塚稲荷神社前。道には近くの「運輸連」から出てきたと思われる米俵を満載したトラック。奥には社殿が見えるが、翌40年に結成された境内模様替奉賛会の拡張整備事業で、手前の青銅製の鳥居とともに後方に移された。

道の左側奥には「伊勢屋呉服店」の看板。200年続く老舗で、敷地には大きな土蔵も建つ。

十三代目の高澤ミチさん(七七)は「孫が小さいころ、風邪で初午に行けず、ガラスにすりついて外を眺めていたことがありました。初午祭はそのくらいに楽しみで思い出にもなる」といい、「商店街は寂しくなりましたが、神社前のこの一角だけでもと一生懸命やっています。毎年5月には街おこしの蔵コンサートを庭で開き、大勢のお客さんでにぎわっているんですよ」と目を細めた。

同じ場所から撮影した現在の写真は、今年の初午祭の様子。露天商は焼きそば屋やお好み焼き屋など軽食が大部分だが、田沼町史によれば、明治末期は見せ物小屋、ガマの油売り、玩具、反物、食料品など、様々な露店が並んでいた。

商店も客であふれ、荒物屋、鍛冶屋、呉服屋、たんす屋などは、年間売り上げの半分近くを初午祭で上げていた。戦後は植木屋が中心になり、後に現在の光景となった。

初午祭でにぎわう一瓶塚稲荷神社前。露店の様子は昔と一変した。鳥居は朱色のコンクリート製（今年3月4日）

参詣者が詰め掛ける一瓶塚稲荷神社（今年3月4日）

車の通行量が少なかった時代は、二の午のころまで2週間近くにぎわいが続いたという。

映画館が2軒もあった

この写真は昭和30年代の同神社前の商店街。歩道に並ぶ自転車は買い物客のものだろうか。ボンネット型バスは市北西部の「飛駒」行き。バスの右上の商店名入り街路灯には「新映」の文字が読める。新映は仲町にあった映画館の名称。町内にはこのほか、下町に「民映」があった。

田沼町商工会の押山澄江さん(五六)は「映画館が2軒もあったなんて、今では信じられません」と話す。

民映に続く路地の入り口には予告の看板が立てられていて、「小林旭や美空ひばりのポスターをじっと見ていた思い出があります。映画館でお菓子を買うのが楽しみでした」と懐かしむ。

現在の商店街。「飛駒」行きの市営バスが走る

名物しんこまんじゅう

右の写真は昭和31年、旧上町交差点（現在の上町交差点は国道293号地点）から唐沢山方面を望んだもの。交差点角に建っていた火の見櫓から写したと思われ、商店が通りに延々と並んでいる様子がよく分かる。

通り右手少し上には、初午祭発祥の田沼名物「しんこまんじゅう」などを製造販売する創業140年の老舗「太田屋」の看板がのぞく。

四代目の阿部力さん(七三)は「国道293号が通る前はこの付近まで露店が出ていた。しんこまんじゅうは当時、初午祭の3日間だけの販売で、ゴザの上に蒸して並べ、あおぎながら売りましたよ」と話す。

通りの両側には幅1メートルほどの用水路が流れ、魚もいて、各商店が入り口部分に石や板の小さな橋を架けていた。夏場は木や竹製のいすを並べて夕涼みをする光景が見られたという。「今も川（用水路）が残っていれば少しは風情があったんだけど」と阿部さん。

裏通りでは、初午祭に合わせてサーカスの興行があった。山形町から木炭バスに乗って見に行ったという岡部隆・田沼町商工会事務局長(六四)は「テントが風でバタバタと揺れていました。空中ブランコを見て、ドキドキした思い出があります」と、少年時代の記憶をたぐり寄せた。

同商工会はもともと、初午祭で商店街が繁盛したことを契機に誕生。商工会法により、昭和35年11月、正式に発足したという。

田沼の人々の初午祭への思いについて、同神社の安蘇谷正彦宮司(六六)は、「(田沼に欠かせない祭りと思っていただくことは)非常にありがたいこと。300年の伝統を守り、末永く受け継いでいかなければいけない」と口元を引き締めた。

現在の旧上町交差点付近。撮影場所にあった火の見櫓は今はない

昭和31年、旧上町交差点から唐沢山方面を写したもの。商店が延々と並んでいる（佐野市郷土博物館提供）